

海外へ向かう中国企業

—特集にあたって—

中国がグローバルな経済大国として台頭しつつあるなか、近年特に注目を集めているのが、中国企業による対外直接投資である。従来海外からの直接投資導入に注力する一方、国内資本の海外流出を厳しく制限する政策をとっていた中国政府は、世紀の変わり目頃を境として、国内企業の海外進出を奨励する方針に転換した。近年では国内の市場競争激化に加え、経常黒字の増大と外貨準備の膨張によって資金環境が大幅に好転したことで、中国企業による直接投資は、海外での工場設立、企業買収、資本参加などさまざまな形態で、そして日米欧など先進工業国からアフリカの最貧国にいたるさまざまな地域へと、堰を切ったように広がりつつある。

このような状況をふまえて中国経営管理学会は、2006年5月の第7回研究大会において、21世紀COEプログラム愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）経済研究会との共催により、「中国企業の海外進出と国際経営」と題する公開シンポジウムを実施した。また、これに続いて9月の秋期研究集会では、エネルギー企業の海外進出に焦点を当てた2報告が行われた。これらの研究活動の成果を生かす形で本誌今号は、上記シンポジウム・研究集会の報告者を中心に、新たに書き起こしを依頼した論文をとりまとめて特集号とした。以下、特集論文の概要を紹介する（かっこ内は執筆者を示す）。

前半の3論文は、いずれも中国企業による直接投資の全体的な趨勢を分析対象に採り上げている。第1論文「中国の「走出去」戦略及び海外進出の現状と課題」（朱炎氏）では、中国企業による対外直接投資の実態、進出の背景と目的を概観したうえで、今後の展望を提示している。第2論文「壁に直面する中国企業と国際進出」（後藤康浩氏）は、日本との比較を視野に入れつつ、海外進出にあたって中国企業が直面する課題を検討している。第3論文「中国企業の海外進出と国際経営」（苑志佳氏）は、主として経営学的な観点から、製造業を中心とする中国企業の海外進出の動機と進出パターンの解明を試みている。

後半の2論文は、中国の対外直接投資の重要な一角を占めるエネルギー産業に焦点を当てている。第4論文「中国の対アフリカ外交と企業進出」(須藤繁氏)と第5論文「中国3大国有石油会社の投資・経営戦略と影響について」(郭四志氏)は、いずれも国有石油・天然ガス企業の海外進出を題材に、それぞれ主として中国政府の資源戦略・外交戦略(須藤論文)、国有企業側の経営戦略と政府との関係(郭論文)という、相互に補完的な側面に重点を置いて分析を行っている。

本特集の意図は、中国企業による対外直接投資というきわめて新しい現象を多様な視点から照射することで、これから増えていくであろうこの分野の研究の一つの礎石を提供することにある。学会内外の論者による依頼原稿で構成する特集号は、本誌にとって初めての試みであるが、今後も折に触れて先端的な研究テーマの特集を行っていきたい。

2007年5月

『中国経営管理研究』編集委員会